

校長室だより  
NO. 11  
令和元年6月11日

# すべては光る

梅園小学校長  
たか すりょうへい  
高 須 亮 平

## 梅園再発見 29 ～六地藏町の歴史・役割と六地藏尊

梅園学区の伝馬通周辺には珍しい名前の町名がいくつかあります。その中で、六地藏町はその1つにあげることができます。町の位置は、裏面の地図で言いますと、南北では伝馬通と国道1号の間、東西ではモダン通りと中央緑道（天下の道）の間に挟まれたあたりです。この六地藏町は、6つの地蔵尊まつが祀られている六地藏堂が存在したことまつから名付けられたようです。今回は、その六地藏町の歴史



現在の六地藏尊像

とその役割、また六地藏尊について探ることにしました。

まず、六地藏町のもともとの位置（江戸時代）については、郭内（堀等で囲まれた内側で城に近い位置）の横町（現・本町）の南側にあったと言われています。これは、寛永年間（1624～1644）の岡崎城圖に「六地藏横町」という名が見られることから明らかです。六地藏の名前は、前述の通り、六地藏尊が祀られていることからですが、それがその当時どのあたりであったかは不明です。

六地藏町は、その郭内の位置から現在の位置に移転しています。この移転の理由はいろいろ考えられますが、1つに岡崎藩主・水野忠善が、それまで郭内にあった武士と商人が混在していた町屋を郭外に移転させ、その跡地に東海道沿いを除き、寺社と武家屋敷を建てて拡張したことまつにありました。

移転以前の六地藏町は、木材等の集積地としての菅生土場（岡崎城南の菅生川の陸揚げ場所）に揚がる荷物を運送する権利を持っていました。その荷物の輸送路は、六地藏町から横町を通して連尺町を横切り、能見町から三河山間部、信州へと続く道筋をたどる重要な経路とされていました。その出発地点を六地藏町が果たしていました。しかし、正保元（1644）年、東総堀から西へ菅生川端一帯に籠崎堤や石垣（裏面地図参照）が築かれ、菅生土場は使えなくなり、土場は西の桜馬場土場（裏面地図）へ移転されました。また、正保2年には菅生橋（現・殿橋）が架橋されました。

そのようなことから、六地藏町が現在地に移転しましたが、その時期について、『岡崎雑記』には正保2（1645）年と記されています。これは、善立寺の移転に合わせた時期で、たぶんいっしょに移転されたものではないかと考えられたものです。また、『岡崎中分間記』には、正保4（1647）年、祐金町、唐澤町とともに移ったことが記されています。この両者には明らかな相違があり、移転の時期は定かではありませんが、土場が桜馬場土場に移された後の正保年間ということが推察されます。

なお、当時の桜馬場は、総構えの東に接し武士の馬術訓練場として整備されていたと（次ページの図）。左右に桜並木があったことから「桜馬場」と呼ばれていたと

ということです。その位置が船荷を降ろす土場として利用され、六地藏町と伝馬町がそれを運送する権利を与えられていました。そのことについて、享保15（1730）年の『桜馬場船荷物人馬持送之定』には、鉄・綿・米麦・大豆・小豆・味噌など穀物は伝馬町の馬が付け送り、干鰯・樽物・あら物・その他すべて六地藏町人足が運送することが決められていました。また、伝馬町塩座の塩荷は満性寺土場に揚げられて、伝馬町が輸送する権利をもっていました。そのため、この桜馬場土場には船荷を運ぶ人足たちが多く集まり賑やかであったとようことです。



桜馬場と桜馬場土場の位置

この桜馬場で荷物の輸送や陸揚げをしていたことは、享和元（1801）年の書上でも明らかであり、享和2年には岡崎城の蔵米を江戸に輸送するのに、六地藏の土場（桜馬場）から平坂、平坂から鳥羽、鳥羽から江戸のルートを通っていたことが書かれています。現在の桜馬場土場の位置は、中央緑道（天下の道）南の桜城橋北岸あたりです。桜馬場と桜城橋と両者に「桜」の字が付けられているのは偶然でしょうか。

次に、六地藏町の名前の由来となっている6体の地藏尊についてです。その言い伝えでは、菅生川に大水が出て溢れたときに、どこからか6体の地藏が流れ着き、それを村人が拾って祠を建てて祀ったことが始まりということです。六地藏尊は、一般に、地獄道を救う檀陀、餓鬼道を救う宝珠、畜生道を救う宝印、修羅道を救う持地、人道を救う除蓋障、天道を救う日光の各地蔵の総称と言われています。

この六地藏堂とその尊像は江戸時代の寛文10（1670）年に火災に遭っています。その後、元禄5（1692）年に早川正次という人が浄財を投じて、京都の仏師に依頼して新しく彫刻させて再建しました。これは、開光仏事（仏が宿るようにする法要）の棟札に書かれていたそうです。それが昭和の戦前まで大切にされていました。その戦前の六地藏尊像の台座には、「六地藏菩薩寶永五戊子歳二月六日宮川氏願主」とあり、石燈籠の2基には「正徳辛卯年十月廿四日宮川氏願主」「寶暦甲戌年四月廿四日施主霍田權七」と刻まれていたそうです。六地藏尊像の台座からは、尊像が宝暦5（1628）年には造られていたことがわかります。これは、六地藏町が移転前の郭内にあった頃です。また、その後、燈籠が正徳元（1711）年、宝暦4（1754）年に寄進されたようです。

戦前は、母乳がよく出るようにと、赤ちゃんを産んだ母親がよく参りに来ていたようですが、残念ながら昭和20（1945）年の岡崎空襲で焼失してしまいました。その当時の六地藏堂と尊像は裏面右の写真として残っているだけです。現在、祀られているものは昭和54（1979）年に再建されました。六地藏町の守りの本尊として、毎月6日の祭礼には右の写真のよう



現在の六地藏堂の祭礼(令和元年6月6日)

に人が集まりお経があげられています。なお、現在の六地藏尊像は冒頭の写真です。今回は『旧岡崎市史』、『新編岡崎市史』、岡崎市教育委員会発掘調査記録等を参考にし、六地藏町の森清総代様はじめ六地藏町の方々のご協力をいただきました。

○ 六地藏町、六地藏堂の位置



桜馬場土場のあった現在の位置(左: 桜城橋)



現在の六地藏堂



○ 戦災に遭う前の六地藏堂と六地藏尊像



戦災に遭う前の六地藏堂



戦災に遭う前の六地藏尊像